

JISS

Spring 2007

【特集】

未来のメダリストを探せ！

タレント発掘が
もたらすもの



2年前のニュースレター(季刊ニュースレターJISS Vol. 5 Spring 2005号)で、福岡県がタレント発掘への取り組みを開始することを取り上げた。あれから2年たった、福岡県の事業も着々と進展し、岡山、和歌山など福岡の動きに追随する自治体も出てきた。今回は県立スポーツ科学情報センターの小平氏にこれまでの活動で出てきた成果や、新たな課題について伺った。

JISS(以下、J)：福岡のタレント発掘が始まって2年間過ぎました。

小平(以下、N)：この2年間の取組をとおり、立ち上げたときには見えなかった「子どもがスポーツに取り組む際のシステムの歪み」が浮き彫りになりました。例えば、福岡のプログラムでは小学校から中学校に上がる段階で、自分が主に取り組む種目がある一定の枠から選択する、というプロセスがあります。ここで自分がやりたいという種目や、これが向いているだろうという種目がわかってくるわけです。この種目を自分の地域で取り組む環境を探そうとする、かなりの子どもたちが、その種目を実施できる環境がないという問題が出てきてしまいました。いままでもそうだったのだろうと思いますが、そういった課題に気づくことが出来た。これはよくはないことですが、収穫ではあると思います。こういった課題を競技団体、学校、教育関係の人たちに気づいていただくことで、何とかしなくてはならない、という空気が広がってきました。これはタレント発掘事業がもたらした副産物なのかもしれません。

J：もう少し詳しくお聞かせ下さい。

N：これまでの子ども達とスポーツとの出会いは、身近にあるクラブやサークルで行われる種目に限定されており、そこでは、子どもの能力や適性への配慮はあまりなされていませんでした。また、そうしたクラブやサークル、部活動においても、指導者がいなければなくなってしまうという実態もありました。子どもが少なくなると、先生の数も少なくなってしまう、部活の休部、廃部になってしまう、という学校の事情もあるし、



福岡県立スポーツ科学情報センタースポーツ振興課 中平 稔人氏

競技団体の中には、県内の各地域で指導環境を整えることが難しいという悩みを持つっている競技団体もあります。ところが、タレント発掘事業が始まるとそう言うことはいなくなってきました。タレント発掘というのは、我々自身に責任が伴う事業だと私は考えています。子どもを選ぶ責任、子どもに種目を決めさせる責任、その種目が出る環境を提供する責任がある。ですから、子どもがやりたい種目を選んだ、その種目を出る環境が十分整備されていないのであれば、我々が整備しなくてはならない。そういった意味で、現在の状況は待ったなしの状況であると思います。

J：具体的な解決策はあるのですか？

N：たとえば、選手が少ない、指導者もわずか、という競技では、すべての地域でそのスポーツをする環境を提供することができなかった。ところが、こういうタレントがあつた地域にいます、なんとかありませんか、という相談をして行く中で、競技団体が具体的なアクションを開始しました。例えば、その地域で体験教室を開く、といった取り組みは既にスタートしています。タレント発掘事業

というのは週に1回のプログラムなのですが、目的の1つはいろいろな種目に出会わせる、ということにあります。ですから、いろいろな種目の人に指導に来てもらっています。指導に来てくださった方たちが、こういった子どもがいるのであれば、なんとかうちの種目を継続できるような道筋を作らなくてはならないという考えを持ってくれました。例えば、タレント発掘プログラムで発掘された子どもたちを自分たちの競技の競技会に参加させてみませんか、といった問いかけが、実行委員会に届くようになってきました。また、逆に子どもたち側からも、こうして体験した競技を続けたい、という意思表示がされるようになってきました。従って、子どもたちとしても、さまざまな競技の中から自分に適した競技を選択するというチャンスが出来たわけですし、競技団体としても、このように能力の高い子どもたちを自分の競技へと導いていくチャンスができた、といえると思います。

J：ショートトラックを始めた子どもの上達の早さに指導者の方が驚いたという話を聞きました。様々な競技の体験教室を通して、いろんな競技の指導者の方が同じような感想を持たれたのでしょうか？

N：そうですね。いろいろな競技の方の指導を仰ぎました、どの競技の指導者の方も例外なく、運動センス、のこみのはやさに驚かれています。自分に適した種目との出会い、という意味では、いままではその種目をやるために集まってきたすべての子どもをみていたわけですから、潜在能力とか、運動能力といった部分には目をつむらざるを得なかった。子どもが自分でマッチした競技を始めるのは早ければ早いほうがいいと思います。しかし、そのような理想的なケースは稀で、自分に適しているか否かにかかわらず一度始めた種目を続けるというケース

他県への波及

岡山県

岡山夢アスリート発掘事業

JISS(以下、J)：岡山県がタレント発掘事業に取り組むことにしたきっかけは何ですか？

上野(以下、U)：岡山県は平成16年に国体を開催しました。その際に天皇杯、皇后杯を獲得したわけですが、国体後の競技力を如何にして維持、向上するのか、といったことが議論されてきました。その中で、タレント発掘が取り組むべき課題として取り上げられました。岡山県のスポーツ振興基本計画の中にはJISS、JOCCとの連携し、国体後の競技力の維持向上に努める、という部分があります。この事業はそれに基づいているものでもありません。

J：具体的な事業の内容について教えてください。

U：平成18年9月から小学校3年生を対象に選手の募集を開始しました。県内の小学3年生は約1万8千人いたわけですが、すべての子どもに対して公募しました。913名の応募があり、このなかから3回の選考を経て23名を選抜しました。

J：なぜ小学3年生を対象としたのでしょうか？

U：ゴールデンエイジを意識しました。この子達を、岡山県を背負って立つ選手に育つよう支援していきたいと考えています。**J：プログラムの特色はありますか？**
U：このプログラムを実施するにあたり、地元の指導者の育成も大切な課題だと考えています。そこで外部協力者の先生を中心に、地元のアスレティックトレーナー(以下、AT)も連携して質の向上を図っています。したがって、AT



岡山県生活環境部スポーツ振興課 上野 剛正氏



が子どもに対してコーディネーショントレーニングを実施しています。

J：プログラムの中心はコーディネーショントレーニングなのでしょうか？

U：他にも知的能力のトレーニングのプログラムなどもあります。これらのプログラムとクロストレーニング(さまざまな種目の体験トレーニング)がメインとなります。クロストレーニングは一つの種目を2ヶ月にわたりトレーニングします。

J：ここで実施する種目はどのようにして決定しているのでしょうか？

U：まず、基本的な運動能力(陸上、水泳、体操)があります。これに加え、国体の実施競技40競技団体に對して育成カリキュラムの作成を要請し、積極的に取り組んでいる競技を初年度の対象とすることになっています。これは子ども達が中学校に進んだ先の育成環境を見据えてのことです。

J：最終的にはオリンピックにおけるメダル獲得が目的になるのでしょうか？

U：オリンピックに限らず、世界で活躍する選手を岡山県から排出する、というところが最終的なゴールだと考えています。岡山県からはマラソンの有森裕子選手をはじめとしてフィギュアスケートの高橋大輔選手など世界レベルの選手が何人か生まれています。こういった選手がコンスタントに生まれてくれるようになることが我々の一つの目標です。

福岡県 タレント発掘事業の進捗

福岡県

がほとんどであろうと思います。早い段階で適切な種目に出会わせてあげること、子どもは大きく伸びる、と思います。これまでのタレント発掘事業の活動を通して、競技団体の人たちはこの事実を実感したのではないかと思います。これは多くの指導者の方からきかれた感想でもあります。

J：タレント発掘事業を始めた段階から、子どもたちのPass Wayというのは大きな課題だと言われてきました。ここまでの中で、Pass Wayを見つけたことができた子どもたちが出てき始めた、ということでしょうか？

N：最終的にこれが正しいPass Wayだったかどうか、という判断はもう少し先にならないとわからないと思います。ただ、今の段階ではあつていた、といつてもいいかと思いますが、

J：このように子どもたちの保護者の方の反応はどうですか？

N：最初の段階で、なぜこのプログラムに参加しようと思ったのですか、というインタビューをしているのですが、自分の子どもにあった種目を見つけてあげたい、という回答が大半を占めていました。これは他の県の事業においても同様であると感じています。プログラムの中で、子どもの適性の評価シートをお見せしたりすると、これが見たくてプログラムに参加しました、という親御さんがいるからです。

J：そのほかにも質の高い指導者からの指導を受けることが出来る、というメリットもあると思います。

N：もちろんそれはあります。それに加えて指導者の方は、事前に私たちと十分な打ち合わせをしてプログラムの基本コンセプトを理解していたと思います。それはどの種目においても同様です。いわば種目を越えた一貫指導のようなイメージです。つまり、いま高めるべき能力

和歌山県

和歌山県ゴールデンキッズ発掘プロジェクト



和歌山県教育委員会生涯学習局スポーツ課 坂口 なおみ氏

JISS(以下、J)：タレント発掘を始めたきっかけはなんでしょうか？

坂口(以下、S)：きっかけは和歌山県が平成16年の埼玉での国民体育大会(以下、国体)で最下位になったことが一つです。これまでも、本県の競技水準は、相対的に長期的に低迷していましたが、47というところで県の強化施策を抜本的に見直すこととしました。それに加えて、平成27年に二巡目となる国体の開催を目指す中、国体のみならず、和歌山から何とか世界で活躍できる子ども達を育てることができなかつた、ということになり、タレント発掘事業に着手することになりました。

J：平成16年という年、福岡のタレント発掘事業が始まった年ですが、そういった影響もあつたのでしょうか？

S：福岡県からは様々な事を勉強させていただきました。福岡県の情報があつたことが和歌山でのタレント発掘事業がスムーズに立ち上がった要因の一つでもあると思います。

J：子ども達の目標は国体なのでしょうか？

S：世界の舞台で活躍することが目標です。国体はもちろん目標となりますが、あくまでも通過点であると考えています。東京にオリンピックを誘致しているのが2016年(平成28年)で、前年の2015年に和歌山県で国体を開催する予定です。この時点で、今年発掘された子ども達が19歳になります。競技特性により違いますが、2016年から2020年のオリンピックでメダルを獲得する子どもを育てたいと考えています。これが私たちの夢です。

J：和歌山県出身のオリンピックは数多

をさまざまな種目を通して高めていく、というプログラムになっています。加えて親に対する教育プログラムも同時に実施しています。今日やったプログラムについて家の中で親と子どもが会話できるようになっていると思います。

J：プログラムを通して、成果はどのように評価されていますか？

N：例えば神経系の能力を評価するために四方向ステップと単純なスピードのある25m走の能力を比較する、といったことをしています。プログラムをこれまで受けてきた子どもたちとあたら追加選抜されてきた子どもを比較するとプログラムを受けてきた子どもたちの方が明らかに神経系の能力が優れていることがわかります。このような具体的な指標などからプログラムの効果は出てきているのではないかと考えています。育成と言った意味では潜在能力の高い子どもたちを選抜し、プログラムで磨いて競技団体に渡す、といった役割は果たすことが出来ていると考えています。ただ、競技団体が求める、子どもの能力とのマッチングも必要です。今後は競技団体とその競技に必要な能力が何であるのかといった部分についてもすりあわせていく必要があると考えています。

J：総合型地域スポーツクラブとタレント発掘の関係はどうあるべきだと考えていますか？

N：総合型地域スポーツクラブの整備は、みんながいつでもどこでもスポーツに親しめる環境を整備することと捉えています。ところが、タレント発掘事業を始めますと、いかに子どもたちがスポーツにふれる機会がないか、ということに気がつかれます。そういったなかで、いま、我々が進めている総合型のコンセプトは、子どもたちがスポーツと出会うチャンスを与える、という意味では非常に有効な取り組みであると考えています。総

くいると思いますが、アテネではどうでしたか？

S：アテネオリンピックでは純粋な意味での和歌山出身者のオリンピックはいませんでした。和歌山にはセーリング競技の練習拠点が、ここでトレーニングをした競技者がアテネオリンピックに出場しています。こういった環境が県内にあることは和歌山県の大きな武器になると考えています。

J：現在の事業の状況を教えてください(3月22日現在)。

S：今月の22日に第1期ゴールデンキッズが誕生しました。和歌山県には9,838人の小学校3年生がいますが、この中の832名が第1ステージに応募してくれました。これは全体の8.5%に上る高い数字だと言えます。1月21日に、第2ステージが開催され、第1ステージから選ばれた170名が参加し、3月4日には最終選考会(第3ステージ)が実施され、101人が参加しました。その中から「第1期ゴールデンキッズ」を認定しました。

平成19年の4月になり、「第1期ゴールデンキッズ」が新4年生になると、3年間にわたる育成プログラムを開始します。

J：プログラムの内容はどういったものなのでしょうか？

S：食育プログラムを設定していることが和歌山の特徴の一つです。保護者の方で、トレーニング期に何を食べたらいいの、か、



合型地域スポーツクラブがそれぞれの地域にあつて、そのなかに子どもの可能性を見出すコーディネーターがいる。コーディネーターに発掘された子どもたちが広域スポーツクラブや県のスポーツ医科学センターに集められ、週に1回は育成プログラムを受ける。もちろん、通常の練習は地域で行います。このような仕組みが完成すれば、地域で子どもが育ちますよね。こういった事業が共通の理念の中で行われるようになってくれば、この事業が完成するのではないかと考えています。

J：そういった意味ではタレント発掘事業が県のスポーツ施策に大きな波を作り出した、といったイメージなのでしょうか？

N：そうですね。スタートした時点では競技団体との関わりは全くと言っていいほどなかった。これが2年目には競技団体が主体的にいろいろな体験プログラムを提供してくれるようになった。今年は競技団体にタレント発掘の担当者配置していただきました。このような方と話し合いをしながら事業が展開している。だんだんとつながりが深くなっているのを感じます。また、競技団体の強化事業の中にタレント発掘と連携した取り組みが位置づけられるようになっています。そのほかにも、県の教育委員会が子どもの体力低下に歯止めをかけるために各幼稚園、小学校の子どもたちの体力向上のプログラムを開発し、提供する、といったことも来年からスタートする予定です。このように、タレント発掘を実施していく中で浮き彫りになってきた課題を解決するためにさまざまな組織がこれまでの仕組みを見直しながら解決に向け取り組んでいます。このような動きが出てきたことは、やがて、スポーツ界の大きなうねりとなっていくと思います。この動きは止めることができない。なぜならそこに子どもがいますからね。

試合前には何を食べたらいいのか、といったことを十分理解している方はほとんどいないと思います。子ども達にとって保護者は最大のサポーターなので、こういったことを知っておいてもらうことは非常に重要だと考えています。そこで、保護者の方と調理実習をしたり、食べることの大切さなどを学んでいただけたらと考えています。

J：3年間のプログラムを経て自分に適した競技を探していくのだと思うのですが、必ず「Pass Way※」といった問題があると思います。これについてはどうお考えですか？

※Pass Way:タレント発掘した子ども達を競技団体や、ナショナルチームにつなげる道筋、システムのこと。



➡ S：和歌山県には団体競技系の部活が減少している中学校が数多く存在します。このような中、例えば、受け皿としての地域に密着したスポーツクラブの活用や、様々な方法を模索していくこととしています。いずれにしても3年後までには何らかの答えを用意してはなりません。県内の競技団体と深くネットワークを組みながら進めて行きたいと考えています。

J：保護者の方の反応はどうですか？

S：非常にいいと思います。保護者の方にアンケートを実施したのですが、ほとんどの方がこれからも続けてほしい、という感想をもっていました。そういった意味ではニーズは非常に高いと思います。最終的に、続けていってよかったと言われるようなプロジェクトにしたいですね・・・。

北海道 美深町

トランポリンからスキー・エアリアル 種目転向型のタレント発掘

石：2〜3年前まで、スキーの少年団の人数はずっと減少傾向にあったんです。ここ1〜2年は上昇傾向にあり、美深においては異常な盛り上がり状態にあると思います。

井：北海道自体、スキー人口は減少の一途にあります。それに対して美深町だけ上昇しています。その原因の分析はしていないのですが、このプロジェクトの影響だと思います。

J：例えば、エアリアルのナショナルチームの選手が美深町に来たりする、ということでしょうか？

石：いままも選手は美深にいます。今年



美深町立美深小学校教諭
石坂 かおり 氏

12月の半ばぐらいから、常に誰かがいるような状態ですね。

J：ずっと合宿でいるのでしょうか？

井：合宿でも入っています。でも、今の時期は町が3ヶ月間ですが雇用しています。これはエアリアルの指導者としてです。例えば、トリノオリンピック代表の逸見佳代選手はナショナルチームを引退していますが、2月いっぱいには美深町にいました。指導者は1ヶ月毎の交代制で、2月末からは倉田選手に指導者として活動してもらいます。選手の方には、指導してもらいながら、トレーニングをしてもらっています。セカンドキャリア的な関わり方ともいえると思います。

石：ナショナルチームの合宿があるときにはナショナルチームのコーチである松井コーチやデビッドコーチも指導をしてくれます。

J：ナショナルの選手であったり、コーチであったりが町に来てくれて、指導をしてくれる、というのは子どもにとってはもちろん、保護者の方にも刺激になるのではないかと思います。

石：子ども達はあまり、選手を意識しないですね。非常に近い存在なので、いつもエアリアルを教えてくれているお兄さん、お姉さん、という感覚みたいです。

井：保護者の方は日本のトップの選手に教えてもらっている、ということとびつくりしているようにです。例えば選手が公開しているブログに、子どもの親から「先生はオリンピックで活躍された選手だったんですね」というメッセージが入っていた、なんてこともありました。

J：そういった意味では選手と町の人々が本当に近いところにいるんですね。こういう環境が町を挙げてエアリアルを応援しよう、という雰囲気につながっているのかと思います。

井：あと、学校の授業にも協力してもらっています。石坂先生がそのあたりの調整を全部やってくれています。

石：学校体育なので、選手にはスキーのおもしろさを伝えてもらっています。例えば、これまでの授業では整備された斜面でしか子どもを滑らすことが出来ませんでした。選手の方達にはいろいろなゲ



北海道教育庁生涯学習部
井上 規之 氏

レンデでの滑り方や、ジャンプの仕方を教えてもらっています。彼らは専門家で、私たちがよりずっと安全に、上手に教えることが出来ます。子ども達はいままで知らなかったスキーの楽しさを味わっていると思います。

井：従来から美深町では町の指導員の方から、スキーの指導を受けていたのですが、これとは違った良さがあるのかな、と思います。こういった経験が、子どもがスキーをすきになり、少年団に子ども達が入ることにつながっていると思います。

J：うまく美深にあるリソースを活用しているんですね。

井：今年の3月には美深町でエアリアルの全日本選手権と北海道選手権が開催されます。実際に美深町でトランポリンをしていた高校生が、去年の夏に初めてウオータージャンプを飛んで、現在では雪上で回転できるようになり、この大会に参加します。理想はスキージャンプの下川町のように、美深出身の選手が世界選手権代表の大半を占めることが出来るようになるということです。ただ、子ども達にはそれぞれ個性があります。ですから、エアリアルに限らず、今後は下川町など近隣の町と連携しながら子ども達の色に合わせて種目を選択できるような仕組みを形成できれば、と考えています。例えば、美深でジャンプをしたい子どもは下川に練習に行き、逆に下川からエアリアルをしたい子どもが美深に来る、といった形の総合型スポーツクラブです。そうすることでスキーが盛んになり、日本の冬季種目の競技力向上につながればいいですね。